

今日の奉仕当番は—  
月雪ミヤコ

先生……  
本日はよろしく  
お願いします

ミヤコほど  
淫乱な本性を隠し持っている  
女の子を  
私は知らない

普段は  
すました顔をして淡々としているが、  
奉仕当番の時にだけ見せる  
ミヤコのメス顔は中々のものだ

最初の頃は  
少し恥ずかしそうな  
素振りがあったが、  
今ではチンポを求めるだけの  
立派なメスである



ミヤコはまず  
軽く舌先で亀頭を  
愛撫すると、



ゴムを  
口の中に含み、

口先をすぼめて  
甘噛みしながら、

ドキ♡

見えないようにゴムを  
被せていき——



喉奥で  
十分に  
竿をしごきながら  
舌の腹で  
亀頭をねぶり、

じつくりと  
チンポを  
味わった



しかしゴムのせいで  
チンポの味をしつかり  
感じる事ができないのが  
切なかったのか、

ミヤコは我慢できない  
とでもいうように  
上下に激しく動く

やがて身体をモジモジさせながら、  
何かを期待するような目で  
ジッと見てきた

「今日はいっぱい  
可愛がってあげるから覚悟してね」  
私はそう伝え、彼女の身体に  
手を伸ばすのだった——

奉仕当番になってからの  
ミヤコのいやらしさは、  
日に日に増している



私を気持ちよくさせたい  
というより——

もはや私の竿を  
性処理道具であるかのように、  
自分から夢中で  
腰を振るようになった



私の身体の上で必死に  
激しく身体をくねらせる  
その様は



メスの獣そのものだ



ミヤコの淫乱さと激しさに  
気圧されてしまい  
ペースを完全に飲まれた私は、  
どうすべきか  
逡巡してしまった

するとミヤコは  
私の様子に気づき、  
一瞬だけ不満そうな顔をした

そして彼女らしからぬ  
妖艶な笑みを浮かべると、  
スツと顔を近づけてきて、

もつと突いて……

恐ろしく艶っぽい声で  
私の欲情を煽ってきた



「ミヤコが  
いけない子だから  
悪いんだよ」  
私はそう言っ  
て  
ゴムを外し



ミヤコをただ  
身体が動くままに  
突きまくった

そして

クニクニ



私が生で射精すると、  
ミヤコは大きく仰け反って  
快楽を貪りつくした

びちゃびちゃと  
子宮に精液が流し込まれる度、  
ミヤコの腰が  
上下に激しく痙攣した

逃げられないように  
手でしっかりと抑えると  
快楽の強さからか、  
普段の彼女からは  
想像もつかないような  
低い唸り声が  
部屋に響き渡った……



私はじっくりとミヤコの  
ま〇このうねりを味わい、  
長い射精をした

ゆっくりとした  
射精をしながら  
彼女の子宮も  
亀頭で愛撫していると、

想像以上にねちっこい  
中出しの快楽に  
耐えられなかったのか—  
ミヤコは完全に白目を剥いて  
失神していた……

はー♡

はー♡

ムニムニ  
ムニムニ  
ムニムニ





射精後、  
ミヤコの口を使って  
チ○ポ掃除をした

失神しているミヤコの喉を  
何度も小突くと、  
ピストンに合わせて  
彼女の腰は痙攣し、  
リズムよく潮を吹いていた

ティッシュが  
なかったので  
ミヤコの  
顔で拭いた

「次の機会には小便でも  
飲ませてあげようかな……」  
そう思いながら、  
私はミヤコに礼を言って  
頭をそっと  
撫でてあげたのだった